

本間久雄：『英國近世唯美主義の研究』の出版とその前後

平 田 耀 子

Honma Hisao and The Publication of *A Study of the Aesthetic Movement in Modern England*

Yoko HIRATA

Abstract

In this paper, I will deal with Honma Hisao's *Eikoku kinsei yuibishugi no kenkyū* (*A Study of the Aesthetic Movement in Modern England*), which was completed in 1934. Honma Hisao was a lecturer at Waseda University at the same time as a successful journalist and literary critic during the Taishō Era. I will review the content and examine the process through which this book was completed. How did Honma take interest in the theme? How long did it take Honma to complete the work? In what order did he write it? In what way was Honma's stay in England in 1928 help complete the book? After discussing these questions, I will consider what caused Honma to turn to Meiji literature after he published the book. Through this process, I hope to clarify the roles of Honma's two masters, Tsubouchi Shōyō and Shimamura Hōgetsu in the writing of *A Study of the Aesthetic Movement in Modern England* as well as the change of time from late Meiji, to early Shōwa.

Key Words

Aesthetic Movement, Honma Hisao, Oscar Wilde, Pre-Raphaelite Movement, William Morris

目 次

はじめに

- I 『英國近世唯美主義の研究』の完成への道程
- II 『英國近世唯美主義の研究』の内容(1)
- III 『英國近世唯美主義の研究』の内容(2)
- IV 『英國近世唯美主義の研究』の評価
「おわり」に代えて

はじめに

1984年(昭和53年)6月、「特集＝日本の英米文学研究—現況と課題」をテーマに『別冊 英語青

年』が発行された。同誌で扱っているのは、平田 禎木(1873-1943)、土居光知(1886-1979)、矢野 峯人(1893-1988)、福原麟太郎(1894-1981)、島田 謹二(1901-1993)、吉田健一(1912-1977)等々、日本を代表する12名の英米文学者であり、本間久雄(1886-1981)の名もそのなかにある¹⁾。ということは、明治文学の研究者であり、オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)、エレン・ケイ(Ellen Key, 1849-1926)、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)等の思想の紹介者であり、大正後期、ジャーナリスティックな文芸評論家として活躍した本間久雄は英文学者であり、それも、1980年代当時の日本を代表する英文学者のひとりであったということである。その彼の学位論文が、『英國近世唯美主義の研究』であった。

『英國近世唯美主義の研究』が出版されたのは1934年（昭和9年）5月19日のことであった。出版社は東京堂、定価は7円50銭であった。500部限定で印刷され、そのうち20部は寄贈分として無番号、残りの480部は番号付きで発売されたものである。総ページ数469ページ、表紙は唯美主義を象徴する孔雀、裏表紙はそれぞれ百合とひまわりを配したものであり、大変豪華な、凝った本であった。装幀を手がけたのは小林古徑であり奇しくも彼が第21回再興院展に「孔雀」を出品した頃のことであった。本間久雄が英文学研究者として自信を持って世に出した書物であった。翌年この書物で本間は英文学博士の学位を取得したのである。本間の著述活動はオスカー・ワイルドの唯美主義思想の紹介から始まったと言ってもよい。爾来25年、ある意味でこの書は本間によるイギリス唯美主義研究の集大成であり、同時に彼によるイギリス思想紹介活動の集大成でもあった。だが、この書の出版後、本間はなぜかイギリス文学から距離を置くようになる。

本稿では、『英國近世唯美主義の研究』作成への道程を簡単にたどり、内容を概観する²⁾。だが、本間の考証の跡を学問的にたどる、あるいは、この書の研究史上の位置づけを試みることは本稿の目的ではない。この書はどのようなプロセスを経て完成されたのだろうか。本間の師、坪内逍遙と島村抱月はその作成にどのように関わったのであろうか。本間が英国唯美主義に興味を抱いた明治末期、『滯歐印象記』を書いた1929年（昭和4年）、そして『英國近世唯美主義の研究』を書いた1934年（昭和9年）の時代思潮の変化は本間の研究人生にどのような影響を与えたのだろうか。この作業を通じて本間の研究人生の上でこの書が果たした役割が明らかになるとともに、日本におけるヨーロッパ文化移入状況とその変化の一端が明らかになればよいと思う。

I 『英國近世唯美主義の研究』の完成への道程

『英國近世唯美主義の研究』の完成までには、い

くつかの道程があった。つまり、島村抱月によって英国世紀末文化の洗礼を受けた時期、そのなかで特にオスカー・ワイルド、ついでウィリアム・モリスの思想を翻訳、紹介した時期、彼らの思想を唯美主義というテーマのもとに学問的に位置づけることを試みた時期、イギリス留学、『英國近世唯美主義の研究』執筆の時期である。

本間のイギリス唯美主義への関心の発端は明らかに卒論の指導教授島村抱月の影響であった³⁾。本間が早稲田大学に入学した時期はほとんど抱月がヨーロッパ留学から帰国した時期と同時であった。本間がイギリス唯美主義のおよその径路と唯美主義者オスカー・ワイルドについて知ったのは、のちの「英國の尚美主義」という題で雑誌『明星』、後に『近代文藝之研究』に掲載された島村抱月の講演であったと思われる⁴⁾。その他にも抱月は、『繪畫談』（明治39年4月『新小説』所載）⁵⁾においてヨーロッパにおける日本画、特に浮世絵の影響について触れ、「新装飾美術」（明治39年5月『新小説』所載）⁶⁾においてアール・ヌヴォーとの対比においてウィリアム・モリスの装飾美術を、「英國最近の繪畫について」（明治39年10月『新小説』所載）⁷⁾において「最近物故した画家」のなかからワッツ（George Frederic Watts, 1817-1904）とホイッスラー（James McNeill Whistler, 1834-1903）を、そして「歐洲近代の繪畫を論ず」（明治42年1月『早稲田文学』所載）⁸⁾においてもホイッスラーについてかなりのスペースを割いており、ホイッスラーと浮世絵との関係にも言及している。本間は『英國近世唯美主義の研究』で扱っているテーマのなかでオスカー・ワイルド、ヨーロッパにおける浮世絵の影響⁹⁾、ウィリアム・モリスの装飾美術、ホイッスラーについては、テーマによって程度こそ違い、すでに抱月より教示されていたと言える。そして、本間がのちに関心を寄せる抱月による翻案小説グラント・アレン（Grant Allen, 1848-1899）作の『其の女』が単行本として出版されたのも1907年（明治40年）のことであった。

本間は抱月の死後1919年（大正8年）『抱月全

集』の編集者として、欧州留学より帰朝後抱月が著述した美術関係の論文や、講義録を含む第3巻『美學及歐洲文藝史』と抱月の学者的著述としてもっとも纏まった『新美辭學』を含む第4巻『《新美辭學》及《文學概論》』を担当しこれらの論文の再録に携わった。また片上伸と共同で、第7巻『文藝雜纂』、中村吉蔵と共同で第8巻『隨筆、日記、書簡』を編集した。この作業を通じてあらためて抱月によってすでに報じられたイギリス人の日本趣味やラファエル前派運動について再認識することになったのである。

『英國近世唯美主義の研究』では後半の部分がオスカー・ワイルドに当てられているが、オスカー・ワイルドに関しては、本間自身がその研究者であり¹⁰⁾、本間がワイルドの移入に果たした役割も研究評価されている¹¹⁾、留学する頃には、ワイルドに関するかぎり日本における権威であった。留学中本間がもっとも力点を置いたのも、ワイルドに関する資料収集であった。帰国後も1929年（昭和4年）の『滯歐印象記』出版から1934年（昭和9年）の『英國近世唯美主義の研究』出版にいたるまで、本間は「オスカア・ワイルド下獄記」、「英國近代藝術に及ぼせる日本の影響」、「オスカア・ワイルド傳—大學生活についての斷片」等々、英國近代美術に関する、そしてワイルドに関する論文を次々と執筆する¹²⁾。それらには、いずれも留学中の成果が反映されており、その集大成が『英國近世唯美主義の研究』であるといってもよからう。

また、大正中期より本間が興味を持ったのがウィリアム・モリスであった¹³⁾。モリスの名前は1918年（大正7年）頃から本間の著述に現れる¹⁴⁾。1924年（大正13年）頃にはこの傾向が加速し、本間は、ウィリアム・モリスの『変化の兆し』（*Signs of Change*）に含まれている諸論文を訳出し、同年、「美感の頹廢」を執筆¹⁵⁾。翌1925年（大正14年）にはモリスの論文に、アーサー・コムプトン・リケットの著『ウィリアム・モリス研究』（*William Morris: a study in personality*）の一節の大意を添えた訳書『吾等如何に生くべきか』（東京堂、1925

年）と、自著『生活の藝術化（モリス傳）』（東京堂、1925年）を公刊した。このような活動を通して、『英國近世唯美主義の研究』を執筆する頃には、ウィリアム・モリスに関する基礎的研究はでき上がっていた。

大正末期、モリス研究が一段落した頃、本間は研究の基盤を広げ、ワイルドやモリスを学問的に位置づける方向に向かった。とはいっても、当時は研究方法も確立しておらず、この道程は同時に正しい研究方法究明への道程でもあったのだが、1925年（大正14年）に本間が研究していたのが、近世英文学に現れた2種類の人生観上の快樂主義の問題であった¹⁶⁾。第1はウォルター・ペイター（Walter Pater, 1839-1896）やオスカー・ワイルド等に現れた審美的快樂主義¹⁷⁾、第2はウィリアム・モリスやグラント・アレン等に現れた社会主義的快樂主義である。これらは所謂世紀末の時代思潮を背景として生まれてきた。ペイターの快樂主義は一種の感覺主義である。感覺に映じた経験、所謂経験の成果ではなく、経験そのものを尊重する。その点で、一種の感覺的経験主義である。オスカー・ワイルドが『ドリアン・グレイの肖像画』のなかで説いた快樂主義には明らかにペイターの影響がある。経験の成果ではなく、経験そのものを尊重し、道徳や習慣を斥けて感覺の純粹と鋭敏を求めている。ペイターもワイルドも感覺を尊重し、刹那刹那の充実した生活をするために美または芸術を求めたので彼らの思想は美的快樂主義といわれる。それに対してモリスの快樂主義は生活美化論である。モリスは所謂芸術的社会主義の立場に立ち、日々の労働を快樂あるものとすることによって不斷に新しく力強く生きようと主張する。グラント・アレンは自己発展ということが人の目的であり、その目的に達することによって人は自己をより強く、健全に、賢く、良くすると考える。本間は世紀末についてのホルブルック・ジャクソン（Holbrook Jackson, 1874-1948）の言葉を挙げて、「十九世紀末は、一般民衆が『如何に生くべきか』の問題を解決するために、率直に快活に努力した時代であった。そのために、この

時代は吾々の興味を牽くのである」¹⁸⁾。そして「二つの快樂主義がともに、この如何にして生きべきかといふ新生活要望の時代を背景として生まれたところに今日の吾々に取つての最も大きい興味が懸かっている。そしてこの立場から見るときのイギリス近代の頹廢派の運動に対しても興味が感じられる」¹⁹⁾と、本間は結論づけている。

本間が「近世英文學上の二つの快樂主義」に続いて著述した「近世英文學上の頹廢派の運動」は1925年（大正14年）2月に発表されたものである²⁰⁾。1880年代の半ばから1890年代の半ばに起こった文学運動で、オスカー・ワイルドやオーブリー・ビアズリー（Aubrey Beardsley, 1872-1898）やアーネスト・ダウソン（Ernest Dowson, 1867-1900）やアーサー・シモンズ（Arthur Symons, 1865-1945）等がこの運動の代表である。本間はまず「頹廢」という言葉の意義についてホルブルック・ジャクソンの著作に述べられているアーサー・シモンズの説を紹介している。次に浪漫派の運動に端を発する頹廢派の径路を述べている。イギリス頹廢派に直接の影響を与えたのはラファエル前派の絵画運動とロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882）やスウィンバーン（Algernon Charles Swinburne, 1837-1909）等の詩、ヴェルレーヌ（Paul Verlaine, 1844-1896）やユイスマンス（J.-K. Huysmans, 1848-1907）のフランスの頹廢派の詩であると述べ、イギリスの頹廢派は英国内では「一種の精神的異郷人」であり「イギリスの所産ではなく、コスモポリタン倫敦の所産である」ことを指摘している。その例として、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』へのユイスマンスの『ア・ル・プール』の影響について論じている。ジャクソンによれば頹廢派の特質は次の4つである。1. 妙にひねくれ、凝っていること。2. 人為的であり、技巧的であること。3. 主我的であること。4. 好奇心の旺盛なこと、である²¹⁾。イギリス頹廢派を解説するにジャクソンの言葉を借りて、「彼らは物質の壓迫と科學的成果の世紀の末葉に生まれ出で、疲れ果てた氣分と絶望とを體現していた。（中略）不神聖な悦びに耽つたと云うて

は自らを折檻したり、悔恨に衝かれた活動の甘苦さを味つたりする事の内に一種の際どい喜びを感じてゐた。（中略）彼らは自らからローマ・カトリック教徒たろうとした」²²⁾と本間は述べている。イギリス頹廢派でも、ワイルドや、ビアズリーにもこの傾向が認められる。本間は、頹廢派は頹廢したものではなく、むしろ宗教的なものに向かう複雑な傾向があったが、1895年のワイルドの逮捕を機として衰退したと結論づけている。この稿のおわりに本間はダンディズムについての関心を表明しているのだが、ダンディズムに関する稿は見あたらない。

本間が次に体系的に研究を始めたのは、ラファエル前派についてであった。ワイルド、そしてモリスについて本間はすでに十分な学識を持っていたが、英国近世における唯美主義運動に関して論を展開するには、唯美主義の発生についての研究が必要であった。このために執筆したのが1926年（大正15年）に『文学思想研究第3巻』と『文学思想研究第4巻』に発表した「近世英文學上の唯美派運動(1)」と「近世英文學上の唯美派運動（承前）」であった²³⁾。「近世英文學上の唯美派運動(1)」では、唯美主義の起源としてのラファエル前派とロセッティ、「近世英文學上の唯美派運動（承前）」では、ウォルター・ペイターの快樂主義、モリスの社会学的快樂主義、そしてイギリス唯美主義、特にワイルドへのボードレル等フランス頹廢派の影響について論じている。『英國近世唯美主義の研究』巻末の「参考書目の事—後記」²⁴⁾に記されているように大正年間には多くの研究書がイギリス本国で出版され、日本でも入手可能になったこともオスカー・ワイルド、ホイッスラー、ウィリアム・モリスなどの思想や活動を19世紀末の精神運動の一部としてより包括的に捉えることができるようになったゆえんであろう。

このように、『英國近世唯美主義の研究』の素地は留学前はかなりできていたとはいえ、1年間のイギリスおよびヨーロッパ留学がこの書に与えた影響ははかりしれない²⁵⁾。本間はラファエル前派の作品、さらにはそれらに強い影響をおよぼした

イタリア初期ルネサンス美術に直に触れ、ワイルドを知り世紀末を体験した人々とコミュニケーションを持った。だが、言うまでもなく本間にもっとも益したのはスチュワート・メイソン (Stuart Mason, 1872-1927) の収集によるワイルド資料の必要な部分を入手したこと、そしてワイルドの遺児ヴィヴィアン・ホランド (Vyvyan Beresford Holland, 1886-1967) の知遇を得、1905年ロスガ *De Profundis* (『獄中記』) という形で発表したワイルドの手記のなかの印刷に付されていない部分を手書きで発表する許可を得たことであった²⁶⁾。このように1909年 (明治42年) より開始し、昭和3年の留学によってクライマックスに達した本間の『英國近世唯美主義の研究』とはどのような内容の本だったのであろうか。

II 『英國近世唯美主義の研究』の内容(1)

本間は「序」において、イギリスにおける唯美主義運動は、「単なる文学上、芸術上の運動ではなく、広く人生観上の或いは實際生活上の運動であり、文学者、画家、彫刻家、芸術家全体の協力運動」²⁷⁾であったと述べている。そして本間の研究は、「唯美派発生の動機と、その発展の径路を明らかにし、且つその社会的背景を審らかにしようとする」²⁸⁾ものであった。さらに、イギリス唯美主義運動にみられる「日本的なもの」を検討し解説を加えようというものであった。つまり、その意味で、この書の研究対象は広範であり、裾野の広い知識と教養を必要とし、比較文化的な視座も含んでいた。資料的に言っても、特にオスカー・ワイルドについては、ワイルド研究家のスチュワート・メイソンによる稀少な収集した参考資料とワイルド獄中手記の全部を駆使したユニークな論文であった。

ただし、当時の慣例に従って脚注はなく、その代わりに適宜「附記」を挿入して本文を補足する形をとっている。また、巻末には「参考書目の事」という一項を加え、論文作成の使用した書物についての文献紹介を行っている。『英國近世唯美主義の研究』出版以後に、出版ディテールは不明であ

るが、『英國近世唯美主義の研究』追記』という24ページの冊子を出版し、そのなかで論文本文を補って唯美主義がいかなる社会情勢から生まれたか、この運動が当時の社会に対していかなる意義を持ったかについて簡単に考察している。

『英國近世唯美主義の研究』は、前編と後編にわかれており、前編では、唯美主義運動の要素と径路について考察しており、後編では唯美派運動の代表者としてオスカー・ワイルドを取り上げ、その思想と生活を解説している。前編では、19世紀後半、文学者ばかりでなく、画家、彫刻家その他の芸術家の活動を巻き込み、半世紀にもわたって展開した唯美派の運動を本間はふたつに力点を置いて取り扱っている。第1には、唯美派の運動を一個の社会的現象として観察すること、そしてそのためには、唯美派発生の動機とその発展の径路とを社会的背景を考慮した上で解明することを心懸けている。第2には、本間は唯美主義運動の中心要素を中世趣味、生活美化、異国趣味の3点に絞り、それぞれの要素を代表する人物としてロセッティ、ウィリアム・モリス、ホイットラーについて論じており、これら3要素が作用しあって全体としてのこの運動を形成するに至る経緯を説明している。さらに、この運動の重要な要素となっている「日本的なもの」の解明を試みている。

1. 唯美派運動の起源について

本間は、第1章では、唯美主義に傾倒した一群の芸術家たちを総じて唯美派と呼び、まず、その派の運動の起源について論じている²⁹⁾。唯美派というのは、雑誌『パンチ』(*Punch*)の画家デュ・モーリエ (George Du Maurier, 1834-1896) が1870年から1880年代の初めにかけて嘲弄的に用いた言葉である。デュ・モーリエの『パンチ』、1881年に初演されたバーナード (F.C. Burnand, 1836-1917) の喜劇『連隊長』(*The Colonel*) や、ギルバート・アンド・サリバン (W.S. Gilbert, 1836-1911; A.S. Sullivan, 1842-1900) のオペラ『ペイシェンス、またはバンソーンの花嫁』(*Patience, or Bunthorne's Bride*) など、唯美派を揶揄した作品が大人気を博

し、それによって唯美派の活動がさらに注目を浴びた。それ故、唯美派の人々は、唯美派を嘲弄、揶揄する人々によって有名になったと言ってもよい。

「唯美派」という言葉はハミルトン (Walter Hamilton, 1844-1899) によればギリシア語源であり、長い間詩および芸術に現れた美の問題について考察する学問を表す言葉としてドイツの美学者によって学問的に用いられた。唯美派というのは、自然および芸術のなかに美を見だし、美を鑑賞するのに誇りを持つものである。彼らは単独の芸術分野ではなく、諸芸術の相関関係のもとでなにが美であるか考え、それによって大衆の趣味を向上させようとした。彼らの「美」の規範を承認しないものを Philistines (俗物) と呼んだ。唯美派の第1の使命は美の愛好を説くであり、第2の使命は学説を実生活に応用するであった。それ故、唯美派は文芸上の運動であると同時に一種の社会運動であったと述べている。

唯美派運動の開始は1848年のロセッティ等によるラファエル前派の結成とされている。その運動は、ロセッティ、スウィンバーン、ウィリアム・モリス、ウォルター・ペイター、ホイッスラーを経てオスカー・ワイルドにいたり、さらにワイルドと同時期にはビアズリー等が活躍したと述べている。

2. 唯美派の径路及び要素について

本間は唯美派の中心要素、中世趣味、生活美化、異国趣味をそれぞれロセッティ、ウィリアム・モリス、ホイッスラーを取り上げて詳述している。

i. ダンテ・ガブリエル・ロセッティ

ロセッティについて論じる前に、本間はまずラファエル前派について紹介している。ラファエル前派とは、当初はホールマン・ハント (William Holman Hunt, 1827-1910)、ジョン・エヴェレット・ミレイ (John Everett Millais, 1829-1896) と、ロセッティ等によって行われた芸術上の革新運動であった。彼らはピサのカンポ・サントのゴッソーリ (Benozzo Gozzoli, 1421-1497) の壁画を見て

自然の真実を発見したと感じた。当時のイギリスの絵画はラファエル以前にもどらなければならぬと主張したので、ラファエル前派と呼ばれた。

ラファエル前派の運動に対して批判的であるものも多くなかでラスキン (John Ruskin, 1819-1900) はラファエル前派に対する好意的批評を行い、それをきっかけにラファエル前派は世間的に認められた。本間はさらに、ラファエル前派は自然、すなわち描かれた対象に忠実であると言いながら自然そのものを彼らの理想に従って選択したと述べる。言ってみればラファエル前派は「その思想と感情に於てはどこ迄も浪漫的であり、中世趣味的であり、その技巧に於ては、どこ迄も寫實的である」³⁰⁾。彼らの運動はわずか数年間しか続かなかつたが、その精神の影響は19世紀末までおよぶこととなった。

ラファエル前派の中心人物ダンテ・ガブリエル・ロセッティについては、彼は技巧的にはミレーやハントにおとるが唯美主義の中心要素「中世趣味を基礎とした神秘的浪漫的な詩人的情趣や思想に於ては、遥かに二人を凌駕していた。」³¹⁾ラファエル前派の仲間たちミレーやハントが自然への忠実→細密描写に向かったのに対し、ロセッティは「事象の内面に沈潜して幻の世界、夢の世界を洞察しようとした。」³²⁾のである。

ロセッティの文学的活動として本間は、ラファエル前派の機関紙として1850年に公刊された『芽生え』(*The Germ*) の第2号に載せられた長詩「昇天聖女」(*The Blessed Damozel*) に注目している。「昇天聖女」に関してウィリアム・モリスやウォルター・ペイターの批評を紹介し、本間も彼らと同調し、「ロセッティが霊肉の二元を一元にしようとしたことは、——肉を霊化し、霊を肉化しようとし」、「その霊肉一如観——肉の霊化の一面を色濃く浮き出させてあるものこそ、作者その人の持つてある中世主義的神秘観に他ならない。」³³⁾と述べている。また、本間はラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1856-1904) の『ロセッティ研究』(*Studies in Rosetti*) を参照して、ダンテのビアトリスと「昇天聖女」の関連、「昇天聖女」の根底にある中世キ

リスト教的世界観、ロセッティの中世趣味の表れとしての霊肉一如観について論じている。

ii. ウィリアム・モリス

近世唯美主義の先駆としてのロセッティの特徴である中世趣味の継承者ウィリアム・モリスについて重要な点は、「ラファエル前派から継承した中世趣味を、その藝術の上に一層具體化したこと」そして「その藝術を實際の生活に應用して、生活美化の実現を期し、そのために一層組織的な團體運動を起した」³⁴⁾という点である。モリスはロセッティと知り合い、ラファエル前派の絵画運動や彼の詩からも大きな影響を受けた。だが、ロセッティから受け継いだ中世趣味をモリスは工芸美術や日常生活まで広げた³⁵⁾。

モリスにとって中世芸術は、制作者にとっても使用者にとっても隣人同士の必要を充たすためという共同の目的を基盤としていた。しかし近代の商業主義は工芸美術の匠から自己の必要品を造ることが隣人の必要品を造ることであるという自覚を奪った。商業主義は工芸美術の匠を意志のない機械と変形し、近隣の購買者を市場の奴隷と変えた。そのため、現在の制作組織のもとではとうてい理想的な優秀な作品を見ることができないという現実に直面して、モリスは中世ギルドの組織に帰ろうと考えた。彼にとって中世主義は趣味の問題ではなく思想であり、信念であった³⁶⁾。

モリスが中世主義的芸術観を保持し、それを実際に実現しようとした目的は、日常生活を美化するためであった。民衆が日常生活で使用する工芸品を芸術的に価値あるものとし、それらを使用することによって使用者の生活が芸術的に豊かになり、また芸術的に価値ある工芸品を制作することは、制作者に喜びを与える。美は一般民衆にとって生活上の重大な要素であった。「有用とも思わず、また美しいとも信じないものは、何物でも家に置くべきでない。」という言葉はもっともよくモリスの思想を表している。

この目的のためにモリスは、芸術家の協力が大切であると考え、モリス・マーシャル・アンド・フォークナー商会 (Morris, Marshall, Faulkner &

Co.) (のちにモリス商会) を設立した。彼は中世のギルド制度とこの制度のもとで生み出される工芸品の意義と価値について信念を持っていたので、1881年にはサリー州の広々としたマートン・アビー (Merton Abbey) に工場を建設し、『有用な仕事と無用の労苦』 (*Useful Work versus Useless Toil*) のなかで、近代の工場とは違って自然に満ちた中世的雰囲気のみで営まれるファクトリー・システムについて述べている。モリスは芸術家としての商売人であることによって社会改造を試み実現したのであった。1911年公開のアーサー・コンプトン・リケット (Arthur Compton-Rickett, 1869-1937) による『キリアム・モリス傳』によれば、社会改革者には、ディッケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) を典型とする人道的改革家、シドニー・ウェップ (Sidney Webb, 1859-1947) を代表とする理知的改革家、モリスを代表とする審美的改革者の3種類ある。つまり、モリスは美による社会的環境の改造を試みたという点で審美的改革家とすることができる³⁷⁾。

iii. ジェームス・マクニール・ホイッスラー

唯美派の特徴のひとつ異国趣味の代表ジェームス・マクニール・ホイッスラーはアイルランド系アメリカ人でウエスト・ポイント陸軍士官学校で教育を受けたが、画業で身をたてることを決意してフランス、のちにイギリスにわたる。彼とロセッティと交友関係を結び、ふたりは日本の芸術に対して共鳴した³⁸⁾。

浮世絵をめぐるホイッスラーとロセッティとのかかわりの背景としては浮世絵のヨーロッパへの伝播の問題があり、本間は浮世絵がパリでブラックモン (Felix Henri Braquemond, 1833-1914) によって発見された経緯を物語っている³⁹⁾。ホイッスラーはパリで浮世絵の発見者ブラックモンとの交際があったことから、おそらくパリで浮世絵を知ったものと思われる。イギリスでの日本流行の端緒も丁度1862年のロンドン万博の頃であり、フランスで浮世絵が注目されたのとはほぼ同時期であった。ロセッティとホイッスラーは日本芸術愛好という点では一致していたが、ロセッティが物語、

題目画を好んだのに対してホイッスラーは絵画の美は物語にあるのではなく、色彩そのものの階和調整にあると考えた。

ホイッスラーの日本趣味は、『磁器の国の姫君』、『黄金の屏風』、『露台』、『バタシー・ブリッジ』(Battersea Bridge) に表れている。ホイッスラーには、日本絵画に傾倒した時期があった。広重の影響については、これを模倣ではなく広重から暗示を受けたという説、あるいは広重の影響を否定している研究者もいる⁴⁰⁾。日本の影響がみられるホイッスラーの一連の作品についてのラスキンとホイッスラーの訴訟事件について述べており、このような事件も日本芸術についてのイギリスの社会の関心を抱かせる役に立ったと述べている。

上述のように中世趣味や異国趣味が交錯して新しい社会的雰囲気醸成を醸し出したのがいわゆる唯美派礼讃であり、この典型がオスカー・ワイルドであったと本間は論じている⁴¹⁾。

3. 唯美派の様相

本間は『英國近世唯美主義の研究』の後半のオスカー・ワイルド理解の前提としてまずいわゆるエッセティック・カルト (Aesthetic cult) の様相について論じている。前述のようにオペラ『ペイシェンス』や『パンチ』誌に現れている Aesthetic cult に対する嘲笑が、かえって唯美派の人気を煽り、一種の流行となった。『パンチ』に描かれた唯美主義者の姿は、いずれも「女性的な性格で、中世的な服装を喜び、伊達者で、気どり屋で、気障で、様子ぶり屋で、すべて誇張的物言ひをして、百合の花と向日葵とを熱狂的に熱愛する人物」⁴²⁾である。そして『ペイシェンス』の主人公バンソーンやグロヴナーは、『パンチ』の唯美主義者を写し取ったものといわれている。

本間は数ページを費やしてオペラの『ペイシェンス』の内容を絵入りで紹介している⁴³⁾。このオペラの風刺の対象となった唯美派は「世間の一般から不健全な、寧ろ怪奇な一流行」⁴⁴⁾とみなされていた。だが、唯美主義者は自分たちがこだわる芸術の世界以外の世界を「俗物」の世界として侮蔑

していた。このオペラが大当たりした理由は、このオペラでは、「俗物」の世界が勝利を占め、得意満面であった唯美主義者が敗北するという結末が世間に受け入れられたからである。

唯美派の詩人についていえば、彼らは第1に「肉派の詩人」と呼ばれている。彼らの詩は、「情慾の感覚的、暗示的な描寫」(sensually-suggestive descriptions of passions)「誇張的な隠喩」(hyperbolic metaphor) や、「怪奇な古詩の脚韻と語句」(old odd ballad rhymes & phrases) を用いている⁴⁵⁾。第2に彼らは、「すべて強烈な、緊張した、誇張的なものを偏愛」し、言語的にも「誇張的暗喩」を頻繁に使用する⁴⁶⁾。彼らは、百合の花、孔雀の羽根、向日葵の花を象徴として使用し、さらに、異国趣味、特に日本趣味を好んだ。当時正統的なイギリス人にとっては必ずしも健全な趣味ではなく、むしろ異国的な悪趣味として排斥されたが、唯美派は日本趣味を好み日常生活においても取り入れようとしていた。

以上唯美派は多方面の様相を持っている。しかし、彼らは「理想的なもの、情熱的なもの、及び美しいもの、眞の愛好家」(true lovers of the ideal, the passionate, & the beautiful) の評価を高めるために助け合ってきたということが出来る⁴⁷⁾。オスカー・ワイルドが活躍を始めた頃は、丁度唯美派の運動が注目を集めた頃であった。ワイルドもまた、唯美的な服装をしてロンドンの盛り場を歩きその服装と奇智頓才は衆目をそばだてた。また、『ペイシェンス』の大成功にともなって唯美主義が、音楽その他の分野にも浸透していった。そして『ペイシェンス』の評判に促されたアメリカでの上演の際にワイルドも1881年から1882年にかけて米国とカナダで講演するために渡米した⁴⁸⁾。

III 『英國近世唯美主義の研究』の内容(2)

1. オスカー・ワイルド伝

『英國近世唯美主義の研究』の後半はオスカー・ワイルドに当てられている。第4章は、オスカー・ワイルドの伝記を取り扱っており、誕生から1895年下獄事件が起こるまでについて著述してい

る⁴⁹⁾。1854年アイルランドのダブリン生まれ、サーの称号を持つ当地の名士であった父と女流作家であった母との間に生まれた。ダブリンのトリニティ・コレッジを優秀な成績で卒業、1874年、オクスフォードのモードリン・コレッジに入学、ラスキンの講義には特に興味をおぼえた⁵⁰⁾。オクスフォード大学生活中もっとも大きな影響を与えたものは、ウォルター・ペイターとダブリンのトリニティ・コレッジのジョン・マハッフィ教授 (John Mahaffy, 1839-1919) と同道したギリシア遍歴であった。ワイルドはこの旅行の途中に立ち寄ったラヴェンナについて書いた長詩「ラヴェンナ」(Ravenna) でニューディゲイト賞を獲得した。

ワイルドは1879年にロンドン進出し、いわゆる審美的服装をしてロンドンの目抜き通りを練り歩いた。ワイルドは服装のみならずその機知を發揮して社交界の人気者になろうとしたものと思われる。そのような行為が売名行為としてかえって人々の反感を買ったこともあった⁵¹⁾。だが、ワイルド自身、審美的服装の根拠として、建築家のゴドウィンによる理想的な服装の意匠を参照しているし、自分自身でも服装に関する理論をいくつかの文章に展開している⁵²⁾。こうした行動には彼なりの理由があったと思われるし⁵³⁾、『ワイルド傳』の著者シェラードは、アイルランド出身で故国からわずかな収入しかないワイルドのロンドンの社交界における立場には理解を示している⁵⁴⁾。

1881年、ワイルドは詩集の刊行に成功、『パンチ』その他の書評での評判は芳しくなかったが、商業的には大成功であった。1882年アメリカでの講演の申込を受け渡米した。ワイルドの渡米はアメリカでセンセーションを呼び、ニューヨーク、その他で講演を行った。帰国後1884年結婚、1885年には長男シリル、1886年には次男ヴィヴィアンが誕生した。結婚後の数年次々と論文を発表、1890年彼唯一の小説『ドリアン・グレイの肖像』、1892年『ウィンダミア婦人の扇』、続けて数本の戯曲、裕福で人気ある作家になった。しかし1895年、彼の下獄事件が起り、彼は不名誉のどん底に落ちた。言うまでもなくこの事件はワイルドの生涯に

決定的な意味を持つのだが、本間をあえてこの事件に言及していない。

2. 唯美主義芸術観

i. ワイルド初期芸術観

本間は次にワイルドの芸術論について、便宜上これを前期と後期に分けて考察している。前期とは1882年、アメリカでの講演と帰国後にロイヤル・アカデミーのクラブで行われた4本の講演に現れている芸術観であり、後期とは、1891年の論文集『意向集』(Intentions) に収められた論文のうちで『架空の頹廢』(The Decay of Lying, 1889)、『ペン、鉛筆、及び毒薬』(Pen, Pencil & Poison, 1889)、『芸術家としての批評家』(The Critic as Artist, 1890)、『社会主義の下に於ける人間の靈魂』(The Soul of Man under Socialism) に現れている芸術観である。前期の特徴はウォルター・ペイターの影響に加えてラファエル前派とモリスの影響が強く見られる点であり、後期1880年代末から1890年初期の特徴はペイターの影響にワイルド独自の見解が強く打ち出されたものである。いずれにせよ、ワイルドの芸術観、人生観を考える際ペイターとモリスが重要なので、本間はまず彼らの思想を紹介する⁵⁵⁾。

ワイルドはオクスフォード在学中ペイターを熟読し、その唯美思想に共鳴し、それを実現しようとした。その意味でペイターはワイルドとその唯美主義思想に関係が深かった。ペイターの思想は生涯を通じて変化するのだが、最初は快樂主義を唱えた。そしてワイルドはこの快樂主義の影響を受けた。ペイターの快樂主義はその著『文藝復興』の「序文」と「結論」においてよく表されている。本間の解説するところによると「各個人は出来るだけ感覚を鋭敏にして、外界及び内界の刹那々に起伏する刺戟、即ち刹那の印象を出来るだけ多く受け入れることによつて、刹那々々の充實した生活を送るべきである」⁵⁶⁾というのである。そして「刹那刹那の印象を、その消え去らぬうちに、いかに強く感受し、いかに妥當に、それを理解するかが重大な問題である。彼れにとつては、刹那の

経験の結果に、生活の、目的があるのではなく、刹那々々の経験そのものが、取りも直さず生活の目的そのものである」⁵⁷⁾。本間が結論づけるところによれば、「ペイターの快樂主義は明かに一種の感覺主義である。……そしてこの感覺到映じた経験そのもの——ペイターの所謂経験の成果ではなく経験そのものを尊重して、そこに生命の焦点を置こうとする……」⁵⁸⁾。さらに推論すると、ペイターの快樂主義は、当然藝術至上の思想を醸し出す。ペイターは藝術に生きることはもっとも深く人生を享樂するゆえんであると考えた。ペイターは美を関知するためには、「対象をそのありのままの状態に於て見ること」、つまり、「実際のありのままの印象を知るといふこと」、「それを心ゆくまで明かに識別し、會得すること」が必要であると考え⁵⁹⁾。本間によれば、ペイターの藝術至上主義、「藝術そのもの、美そのものに対する態度」は、近世英文学史上画期的なものであった⁶⁰⁾。

ペイターと同様ワイルドに強い影響を与えたのがウィリアム・モリスであった。モリスは1870年代、工芸美術家としての立場から『工芸美術論』(*The Lesser Arts*)、1779年の『民衆藝術論』(*The Art of the People*)、1880年の『生活の美』(*The Art of the People*)、『生活の美』(*The Beauty of Life*)、『文明に於ける建築の前途』(*The Prospects of Architecture in Civilization*)などに独自の藝術論を展開している。本間はワイルドの初期の論文中に「労働者への価値」とか労働者が美しい事物を造ることに感じる快樂、工芸美術では、その制作者に快樂を与え、その使用者に快樂を与えることが重要という思想、有用と美とは一致するという思想、社会や人生を美化することによって改造しようという意識等々、モリスの思想の片々がうかがわれることを指摘している。このように、初期のワイルドの藝術観はペイターから出発しているのだが、モリス的な社会改造意識がきわめて強いものであった⁶¹⁾。

ii. ワイルドの「新美学」

ワイルド後期の藝術観はペイターから出発しているのではあるが、それにワイルド独自の解釈を

加えて彼独特なものとなっている。本間はワイルド後期の藝術観は『架空の頽廢』にもっともよく表現されていると考え、この書を中心にワイルドの藝術観を抽出している。彼の藝術観はおよそ3点に要約することができる。これらはワイルド自身「新美学の教義」(*The Doctrines of the New Aesthetics*)と呼んでいるものである⁶²⁾。第1の教義は、ワイルドの言葉を借りると「藝術はそれ自らの外何物をも表現しない。(Art never expresses anything but itself.)」⁶³⁾というのである。ここから2つの視点が導き出される。つまり、フランスの頽廢派の文人、テオフィル・ゴージェエ(*Théophile Gautier, 1811-1872*)やシャルル・ボードレール(*Charles Baudelaire, 1821-1867*)の影響を受けた、藝術は道德、宗教その他から独立して、「一切世間の外的關係から離脱して、それ自らの目的を持っている」という視点、それゆえ、「藝術は〈時〉と〈所〉とを超越してゐる」という視点である⁶⁴⁾。

第2の教義は、「一切の悪藝術は、『人生』と『自然』とに歸り、それらを理想に高めるところから來る。」というのである⁶⁵⁾。ワイルドは藝術と人生をはっきりと分け、藝術の世界と現実の世界や実際の人生はまったく異なったものであると考える。時代の風潮は写実主義であったが、ワイルドはそれに反対して、「〈架空〉、つまり、美しい、虚偽の事柄を語ることである誇張の一形式たる文學」が衰退し、写実主義が力を得ていることに反発している⁶⁶⁾。ワイルドの第3の教義は「人生は、藝術が人生を模倣するよりいっそう多く、藝術を模倣する」、そして同様に、「『自然』もまた『藝術』を模倣する」⁶⁷⁾という思想をいくつかの例をあげて解説している。

これらの藝術観の根底となる基本的思想は、美至上、藝術至上主義である。『藝術』至上思想の理論的根拠は、本間が要約するところによると、人生は限られているが、藝術の世界は無限であるという信念であり、個性の發揮が個人の生の目的であり、これを可能にする唯一の道が藝術であるという思想である⁶⁸⁾。第1の点については、ワイルドは、人生は行為の世界、すなわち限定された世

界であるのに対して芸術の世界は観照の世界であり、したがってより高次にあると考えた。第2の点についてワイルドは、我々が自身の個性を發揮するところ、すなわち個人主義を実現するところに我々の生活の価値がある⁶⁹⁾、そして芸術は完全な真の人格、つまり徹底的個人主義を実現し得る唯一の道であると考えた⁷⁰⁾。

ここには2つの傾向——現実を遊離しようとする傾向と、現実をよりよくしようとする傾向がある。つまりペイター的傾向とモリス的傾向である。この2つの傾向はペイターとモリスを同時に生んだ時代の悩みでもあった。この時代はホルブルック・ジャクソンの『一八九〇年代』によれば、生氣はつらつとして、「新」という形容詞が流行した時代であった。また1880年代には社会改造意識も強烈であり、「社会民主党」の成立、シドニー・ウェブ(Sidney Webb, 1859-1947)やバーナード・ショー(Bernard Shaw, 1856-1950)のフェビアン協会の設立にみられるように貧困や労働方や不健康や数々の社会悪を根絶しようという社会的雰囲気が強かった。「この時代は一般民衆が『いかに生きるべきか』の問題を解決するために、知力的に、想像的に、精神的に、率直に活動した時代であった」⁷¹⁾。本間の説くところによれば、イギリス唯美主義は「いかに生きるべきか」に悩み苦しんだ結果考え出された新しい芸術論であり、新しい生活様式であった。ワイルドは『ドリアン・グレイの肖像』で美至上主義者の現実遊離的な、人為的な官能追求の生活を描くことによって、当時の物質的な粗野な俗物主義に反抗して美しい美的生活を創造しようとした。この著作の意図はワイルドの言葉を借りれば、「吾々の唯美主義運動は教養の少ない、無味乾燥な現代の社会に対する反動」⁷²⁾であった。本間の論じるところによれば、この作は一面において、一種の社会改造意識を基調とした社会批評でもあり、文明批評でもある。そして、ワイルドの芸術論についても同じことがいえる。そしてそこに芸術論としての唯美主義の文化史的意義があると本間は結論している。

3. 唯美主義と日本

次に本間はワイルドは特にその初期の著作のなかでいくたびか日本の芸術について触れており⁷³⁾、その芸術論の基礎の一部として日本の芸術が取り入れられていると論じている。芸術は人生そのものの写生ではなく、作者がその独自の個性を通して人生を眺め、選択し、人生を改造し、従来にない新しい人生を創造するものである。そして、芸術の極致が写実でなく創造であることを例証するために、ワイルドは日本の浮世絵を引き合いに出している。本間は、ワイルドが日本に旅行することを考えたこと、遺児ヴィヴィアン・ホランドによれば、日本の芸術品を好んだこと、そしてバーン・ジョーンズ(Edward Burne-Jones, 1833-1898)やホイッスラー、特に後者の日本趣味の影響を受けたことを述べている。本間はさらに、ホイッスラーに次いで日本版画、特に歌麿の影響を受け、有名な『サロメ』(Salome)の挿絵を創作したオーブリー・ビアズリーについて論じている。あらゆる方面で従来生活にあきたりないで「如何に生きべきか」の問題に直面し、なにか新しい変わった生活様式や趣味の世界を求めわびていた時代であったので、若い人はホイッスラーやワイルドなどの日本愛好の趣味に迎合した⁷⁴⁾。日本の芸術、浮世絵、種々の工芸品や装飾美術はワイルドの芸術観に1つの基礎を与え、かつそれを立証する資料となり、広重や北斎はホイッスラーに大きな影響を与え、歌麿はビアズリーを生んだと言ってもよい。本間はこのことから日本の芸術がイギリスの唯美派運動の革新的要素の1つとして重要な位置を持っていることを指摘している。

4. 唯美主義の衰退

i. ワイルド下獄誌

イギリス唯美主義運動に対する日本美術の影響について論じたのち、本間は唯美主義の衰退と題して、ワイルドの晩年について記述している。1880年代の終わりから1990年代の始めにかけてはオスカー・ワイルドの全盛期であった。論文、小説、劇作でも成功を取めイギリスでもっとも人気のあ

る劇作家となったが、この全盛期は同時に衰退期であり、唯美主義の凋落期でもあった。そして下獄事件によって彼の名声は失われ、唯美主義も顧みられなくなったのである。ワイルドの下獄事件とは、次のようなものである。1895年、ワイルドはクイーンズベリー侯爵を相手取り、誹謗の訴えを起こした。裁判が行われ、原告のワイルドが敗訴した。それから3日目、彼は猥褻罪として起訴され、有罪となり2年間の牢獄生活を送った、というのである。ワイルドの死後5年たって『デイ・プロファンディス』(獄中記) (*De Profundis*) が出版され、それ以来ワイルド再評価の機運が高まった。ワイルドをよく知っていた人々による伝記もいくつか出版されたが、この辺の事情については一様に詳しく物語るのを避けていた⁷⁵⁾。

この点を明らかにするには同時代の新聞・雑誌類を検証しなければならず研究は困難を極めていた。しかし本間は、イギリス滞在中『ワイルド書目史』(*Bibliography of Oscar Wilde*) 1914年版の著者スチュワート・メイソンが収集したワイルド関係資料を購入することができたので⁷⁶⁾。それを参照してこの章を執筆しているものと思われる。つまり、オスカー・ワイルドとクイーンズベリー侯爵の三男アルフレッド・ダグラス卿(Lord Alfred Douglas, 1870-1945)との間には男色関係があり、そのことが衆目を集めたこと、それに対してクイーンズベリー侯爵が立腹し、ワイルドと侯爵が直接対面し、非難、侮辱の応酬となったこと、結局ワイルドは猥褻罪に問われ2年間の苦役の判決が与えられたことなどである。さらに本間は、クイーンズベリー侯爵とダグラス卿との間には憎悪関係があったこと、ワイルドが当時のジャーナリズムの憎まれ役であったことに言及し、ワイルド裁判についても、ワイルド逮捕のタイミング、ワイルドの相手のダグラス卿は一切無関係とされたこと、刑罰の性質等々を考慮に入れ、クイーンズベリー侯爵と体制側の姿勢がワイルドに不利に働いた事情について述べている。

ii. 『デイ・プロファンディス』考

本間は最後に、下獄がワイルドにもたらした心

理的影響について『デイ・プロファンディス』を通じて考察している。『デイ・プロファンディス』はワイルドが服役中、出獄を6ヶ月後にひかえ特別に許可されて、監獄用の便せんにダグラス卿にあてて書きつづった手紙である。それを親友ロバート・ロス(Robert Baldwin Ross, 1869-1918)に手渡し、ロスが編集して1905年に出版したものである。『デイ・プロファンディス』という命名もロスによるものである。出版の理由はワイルド再認識を促すためと、ワイルドの負債の返却と遺児の養育の費用をまかなうためであった。ただし、ワイルドの手紙の約3分の1は、私的なことからなので削除されている。ロスはこの手紙を大英博物館に委託し、1960年までは公開禁止とした。しかし1913年にアーサー・ランソム(Arthur Ransome, 1884-1967)の『ワイルド研究』(*Oscar Wilde: A Critical Study*)の出版に際して彼の記述の真偽をめぐっていわゆるランソム事件が起こり、裁判のさいにワイルドの手紙を公開せざるを得なくなった。彼は公開禁止の部分を15部印刷し、関係者にくばった。その1部をワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドが所有し、本間はホランドの許可を得てその内容を写し取ったのである⁷⁷⁾。

ダグラス卿との心的径路を経てワイルドが達した思想は、ロスが当初出版した手記に表現されているように「人間の感得し得る最高の情緒」である悲哀の哲理であり、悲哀の具現化としてのキリスト観であった。悲哀の意味を感受し会得する心状態は「謙虚な心」である。ワイルドのキリスト観もその悲哀観と関係がある⁷⁸⁾。ワイルドが忍従と謙虚の心境に達したのは、禁止本のなかに表現された痛恨、懊悩を通してであり、忍従と謙虚の心境のなかでダグラスに対する彼の感情がいっそう強く表現されている⁷⁹⁾。

『獄中記』に対する批評はだいたい2種類に分かれる。第1はワイルドが唯美主義生活を否定して新しい生活を希求した一種の懺悔と解釈したものであり、第2は、この手記のワイルドは従来の嫌忌すべきワイルドと少しも変わっていない、というものである⁸⁰⁾。これらに対して本間の説は、獄

中手記は、従前の生活に対する悔悟ではなくて、寧ろ是認であり、懺悔ではなくて寧ろ主張であり、靈魂の誕生ではなくて、「靈魂の拡充」であるというのである。ワイルドの所謂新生活は全く前生活の継続である。いままで楯の反面しか見ていなかった彼は牢獄を通して始めて両面を見た。しかし彼は従来見ていた楯の半分の生活を否定しているわけではない。獄中手記は従来の唯美生活に対する世の非難に対する新しい一種の挑戦とも考えられる⁸¹⁾。

ワイルドは、ペイターによる「経験の成果ではなく、経験そのものが目的である」という唯美主義の人生観上の教義をそのまま実行に移したのである⁸²⁾。唯美主義を芸術上または社会上の1つの運動として見る場合には、ワイルドの下獄を境に表面的には、後を絶ったとは言わないまでも甚だしく衰退した。しかし、少なくともその人生観上の指導原理として唯美主義は下獄後におけるワイルドにおいてその神髓に徹した一個の代表者を見いだした。「ワイルドはもっとも徹底した意味において、唯美主義の究境を一身に具現した一代の使徒であり、同時、(中略)に近世文化の象徴的人物の第1であった」と本間は結論づけている⁸³⁾。

iii. 唯美主義者とは

以上『英國近世唯美主義の研究』の内容を章ごとにたどってみた。ここに扱われている唯美主義の代表者たちは、ほとんどすべて唯美主義者以外の顔を持っていた。たとえば商売人として成功したウィリアム・モリスのテキスタイルや壁紙は今でも人気がある。そして、社会主義者として積極的にデモに参加し、各地でプロバガンダ講演を行ったモリスの名は社会主義の歴史にも残っている。また、ジェームズ・マクニール・ホイッスラーの代表作『母親の肖像』からは唯美主義の特徴の1つとされている異国趣味はほとんどどうかがわからない。そして、下獄以前、社交界の人々を風刺と機知とユーモアたっぷりに描いて名声を博し、現在にいたるもその作品がウエスト・エンドの劇場を満杯にする劇作家オスカー・ワイルドは、下獄後晩年を過ごしたパリでは他人に飲み代をたか

って歩くルンペンに他ならなかった。

だが、広義には唯美主義は、ある時期の彼らのある側面を定義する思想であり、彼らの生き方をつなぐ紐帯であり、さらに彼らを大陸の文人たちとつなぐ紐帯でもあった。彼らは社会のメインストリームに乗らない、はみ出し者的な側面を持っていた。社会のメインストリームに乗らず、その外にいて、メインな行き方に対するアンチテーゼを突きつける存在であった。思えば、1909年(明治42年)本間が最初にオスカー・ワイルドの唯美主義思想に注目したとき、彼の嗅覚を刺激したのは、この点であったと思われる。それは、無意識に明治という重い時代に対するアンチテーゼを、自然主義という灰色の世界に対するアンチテーゼを求める若者にアピールし、米沢という時代のメインストリームに乗ったことのない土地からやってきた若者に自らの立ち位置を自覚させる役割を果たしたのかもしれない。

IV 『英國近世唯美主義の研究』の評価

『英國近世唯美主義の研究』出版後間もなくいろいろな書評がでる。そのいくつかを挙げてみる。

「英文学専攻の本間久雄君は、オスカア・ワイルドの研究者としては恐らく日本に於ける第一人者であらう、此書はヴィクトリア時代に於ける唯美派の起源に遡り、ラファエル前派の跡を尋ね、ロセッティ、モリス、ホイッスラー等及び、此處にワイルドに居たるの序幕を了り、進んで本書の眼目たる後編に入りて、ワイルドに就て、其の英國留学中に討搜し得たる資料と、爾後の研究とによりて、大いに其の蘊蓄を發揮した。」(徳富蘇峰)⁸⁴⁾

「本間氏のこの著は、世にも稀なる精根を以て、唯美主義、殊にワイルドに關するその、現地にいての蒐集の餘に成つたものである。自分はこの週末東京堂畫廊に催されたその展覽會を見て驚嘆した。禁止本として大英博物館に秘藏されてゐる「デ・プロファンデイス」の謄寫

本をはじめとし、かの地好事の士の丹精になった切抜帖、稀覯の珍書、小冊子、芝居の番組、ポスタアの末に至るまで、所狭きまでに場内を埋めてゐるのを見て、この著が決して一朝一夕に成ったものでないとの感を深くしたのである。

わが浮世繪がウイツスラア、ビアツレエに與へた暗示、影響についてまた、ラファエル前派の諸畫家、ワイルド自身が如何にこの極東の藝術に關心をもつてゐたかについて、も文献に徴し、作物につき、氏は實に前人未到の精緻の検討を示してゐる。「唯美主義の研究」はこの點において、正に歐洲における最初の完全な浮世繪版畫史とも見られ得るのである。」(平田禿木)⁸⁵⁾

「(前略) 本當に本書に價値を與へる點は、同誌の昔から愛好されてゐたと聞くとところの「わがオスカア・ワイルド」の研究である。この點こそは同誌がオリヂナル點な研究であり、(中略) 正に世界的なものである。(後略)

英國における十九世紀末期の新しい美術運動は特に日本の文化に非常に關係がある。即ち日本美術(特に浮世繪とか、その他の工藝美術)が如何にこの新しい美術運動に影響を與へてゐるかは周知の事實ではあるが、日頃日本美術に興味をもつてゐられると聞く本著者が、その事實を此英國の美術史の發展要素として詳細に説明してゐる點も本書の特色の一つである。」(西脇順三郎)⁸⁶⁾

『英國近世唯美主義の研究』のなかでもっとも評価されたのは、また、スチュワート・メイソンの蒐集によるワイルドに関する資料を得ることによってワイルド下獄事件の顛末が明らかになったこと、*De Profundis*の未出版部分を使用し、その結果、ワイルドについてより深みのある分析が可能になったことであつた。こうしてみると、やはり『英國近世唯美主義の研究』の執筆には1928年のイギリス留学が非常に重要な役割を果たしたことがわかる。事件の顛末を同時代人として見聞していたイギリスの読者と違って、本間を含めて日本の

読者は、この間の事情については白紙状態であつた。その事件の詳細は今日ではすでによく知られたものとなっているが、当時本間による新しい資料を用いたオスカー・ワイルド下獄記は日本人の読者にとって始めて明らかになったことがらであつた。

本間は『ディ・プロファンディス』(『獄中記』)の最初の翻訳者であつたわけだが、本間の時代が手にすることができたのは、いうまでもなく1905年に出版されたロバート・ロスによる縮小版であつた。ほとんどの登場人物が存命中であつた当時、彼らを傷つけないようにと配慮されたものであるから、人物關係がわからないように固有名詞をのぞき、抽象的な読み物に編集されたものであつた。未公開の部分は私的な部分であり、ワイルドとダグラス卿との關係を含んでおり、ワイルドの悩みや苦しみがよく表現されている。1通の文さえくれない「友人」に対する恨み辛み、牢獄のなかで初めて体験した苦痛や屈辱、裁判の不公平や獄中の不正、はたまた囚人同士の思いやり、そして獄中で知つた母スベランザと妻コンスタンスの死、こよなく愛する息子たちとの永遠の別れ、獄舎のなかで初めて知つた人生の悲哀や謙讓の心、こんな雑多な内容が、あるいは生々しい感情の表出として、あるいは深く沈潜し浄化され思想の形で表現されている。出版された部分を日向とすれば陰影の部分であり、二面を合わせてみなければ『ディ・プロファンディス』を理解することはできない。それ故、ワイルドを研究するためにはもっとも貴重な資料であつたわけである。

一方、留学の成果は本間が「世紀末」の体現者であり生き証人であつたイギリスの文人たちとの談話を通して当時の雰囲気や、彼らが一時傾倒した日本趣味の実態について、知見を得たことにも現れている。イギリス人の日本に対する興味は予想以上であり、ロセッティやワイルドなどもその移入に關与したことがわかつた。イギリスに来て初めてわかつたこうした事實をもとに、本間は『英國近世唯美主義の研究』の「ジェームズ・ホイッスラーの項や「唯美主義と日本」の項を書いたの

である。

「おわり」に代えて

1936年（昭和11年）4月7日、本間久雄は『英國近世唯美主義の研究』によって博士号を獲得した。論文審査には五十嵐力と吉江喬松があたった。当時の博士号は学者が一生かけて追求した研究の集大成であった。本間久雄、当時49歳、たしかに島村抱月の指導によりワイルドとトルストイを扱った「近代批評上の二問題」というタイトルで卒業論文を書いて以来⁸⁷⁾、ワイルドは本間の研究の主要テーマであり続けた。しかし、時折出版に付された本間の随筆や論攷の再録本以外、新しい研究として英文学関係の著述は彼の書誌録から影をひそめる。そして『英國近世唯美主義の研究』の出版の翌年早くも『明治文學史 上巻』が出版される。博士号取得以前の1935年7月には『明治文學史 上巻』の出版、1937年10月には早くも『明治文學史 下巻』が出版される。本間久雄の著述リストには、明治文学関係、歌舞伎、そして日本画関係の記事や論攷が増える。たしかに本間久雄文献録を見るとこの書の出版以後英文学に関する記事は少なくなる。本間の場合、その研究歴を見ると、他分野にわたっており、しかも同時期に一分野に重点を置きつつ他の分野の研究発表を行っていることも珍しくない⁸⁸⁾一概には言えないが、1928年のイギリス留学の直接の成果であった『英國近世唯美主義の研究』の完成は、「明治文学者」本間久雄への転換点とは言わないまでも、「英文学者」本間久雄が、明治文学への傾斜を強めるきっかけとなった。

本間が研究テーマが明治文学に傾斜していった理由は『英國近世唯美主義の研究』がこれまでの研究の集大成であったという以外、いくつか考えられる。まず、本間とその師、島村抱月と坪内逍遙との関係であろう。『英國近世唯美主義の研究』は、早稲田大学文学科に入学以来島村抱月に師事し、卒論を書いて以来、著述業に携わる者としてさまざまな文筆活動を行いながら研究を続け、博士請求論文の形にまとめ上げたものであった。た

だし、抱月にとってのイギリスは本間にとってのイギリスとは異なっていた。20世紀初頭抱月が英国に求めたものは、何よりも最先端の思潮であり、日本の将来の指標であった。1928年のイギリスはかつて20代の本間が抱月を通じてあこがれ、新しい知識や思想を吸収しようとした世紀末文化の余韻漂うイギリスではなかった。第一次世界大戦ののち、戦勝国であっても戦渦に巻き込まれ疲弊したイギリスに代わって新しい文化や流行のリーダーとなったのはアメリカであった。20代の本間が抱月を通じてあこがれ、インスピレーションを得た世紀末イギリス文化は、もはや歴史のひとつになり、研究の対象となっていたのである。本間が訪れた英国はもはや世界の最先端の思潮を提供する場ではなかった。イギリスもアメリカ文化の流入を拒み得なかったのである。日本も新しいものを求める若者はイギリスではなくあるいはアメリカに、あるいはロシアにその範を求めるようになった。そして、本間にインスピレーションを与えた抱月は、『英國近世唯美主義の研究』が完成された時点ですでに亡き人であった。

明治文学への傾斜は、抱月亡き後『早稲田文学』の編集その他であらたに緊密な交流関係を構築した坪内逍遙の影響であったと思われる。抱月亡き後本間が『早稲田文学』編集上のアドヴァイスを求めたのは、まず相馬御風であり、次に坪内逍遙であった。1920年2月より坪内逍遙の「五十年前に観た歌舞伎の追憶」の『早稲田文学』紙上連載をきっかけに本間は逍遙と近しく接触するようになった。編集上のアドヴァイスだけでなく、逍遙の学問研究に対する態度や方法論に啓発されたことは十分に考えられる。本間は、関東大震災以後、明治の文物の喪失を危惧した逍遙の唱道に感化されたのであろうか、『早稲田文学』に大正14年3月より昭和2年6月にわたり全7巻の「明治文學號」を編集した。本間自身の研究テーマも英国唯美主義から明治文学に傾斜したのも無理はなからう。

さらに、大正後期から昭和初期にかけての世相や文壇の風潮も、本間を英国唯美主義研究から明治文学研究に向かわせる要因となったかもしれな

い、本間は明治末年自然主義の評論家として文壇にデビューしたが、大正期に入っても、美術雑誌の様相を兼ね備え、個々の文人の自由な個性を生かした『白樺』的なあり方、耽美主義や理想主義の文学、果ては農民文学にも共感を抱いた。しかし、昭和期のプロレタリア文学には本間の文学的指向とは相容れないものがあつたものと思われる。さらに、主として社会主義的思想や文学に対して向けられており、大正末期からじわりと感じられるようになった政府による言論統制や弾圧も本間をより体制順応的な明治文学の研究に向かわせた要因であつたかもしれない。満州事変以後、日本が全体主義国家への道を歩むなかで、個人主義やデカダン色の強い、しかも「敵国」イギリスの唯美主義思想の研究はあまり歓迎されない分野であつたに違いない。事実、本間も昭和10年代のある日、特高の訪問を受けることになつたのである。1928年の留学の結果花開いた本間による日欧比較文化に関する論攷もまた『英國近世唯美主義の研究』出版後は姿を消す。こうした論攷がふたたび姿を現すようになったのは第二次大戦終戦以後であつた。

- 1) (野中 1984: 10-11)
- 2) 本稿を作成するにあたって固有名詞、引用部分に関しては漢字、カタカナともに原文通りとしたが、その他の部分に関しては漢字カタカナ表記ともに現行の用法に準じた。
- 3) 島村抱月の影響については(平田 2009c) 参照。
- 4) (島村 1907: 1-7, 島村瀧太郎 1909: 518-594)
- 5) (島村 1919: 228-232)
- 6) (島村 1919: 233-237)
- 7) (島村 1919: 221-227)
- 8) (島村 1919: 184-216)
- 9) (島村 1919: 228-232)
- 10) (本間 1934a: 107-111)
- 11) (井村 1969: 39-60; 平井 1980: 142-143; 佐々木 1999: 133-141, 佐々木 2001: 87-96, 佐々木 <http://www.ne.jp/asahi/econ/wild/page161.html>, 佐々木 <http://www.ne.jp/asahi/econ/wild/page161.html#taisyo>; Hirata 2009a: 241-266)
- 12) (本間 1930a: 87-104, 1930b: 471-480, 1930c, 1930d: 3-26, 1931a, 1931c: 201-230, 1934b: 275-289)
- 13) 本間によるモリス研究については(平田 2009b: 115-146)。
- 14) (本間 1918a: 21-23, 本間1918b: 7-14) 本間による他のモリス関係の論文については、(平田 2008b) 参照のこと。
- 15) (本間 1924: 2-18)
- 16) (本間 1925a: 20-25)
- 17) 本間のウォルター・ペイターへの興味については、(本間 1965: 253-266)。
- 18) (本間 1925b: 24-25)
- 19) (本間 1925b: 25)
- 20) (本間 1925b: 2-15) 「近世英文學上の二つの快樂主義」と「近世英文學上の頽廢派の運動」は(本間 1925c) に所収されている。
- 21) (本間 1925c: 118)
- 22) (本間 1925c: 123-124)
- 23) これらのちに「英國唯美主義派の径路(1)~(5)として(本間 1925c) に収められている。
- 24) (本間 1934c: 445-459)
- 25) 本間久雄の留学とその成果については、(平田 2008a: 23-40) 参照。
- 26) (平田 2008a: 34-35)
- 27) (本間 1934c: 序 1)
- 28) (本間 1934c: 序 2)
- 29) 唯美派の起源については、(本間1934c: 5-11)。
- 30) (本間 1934c: 21)
- 31) (本間 1934c: 27)
- 32) (本間 1934c: 30)
- 33) (本間 1934c: 43)
- 34) (本間 1934c: 65)
- 35) (本間 1934c: 67-75)
- 36) (本間 1934c: 76-81)
- 37) (本間 1934c: 91-92)
- 38) (本間 1934c: 96-98)
- 39) (本間 1934c: 99)
- 40) 「夜を描いた最初の画家」広重の模倣ではなくベンネルいわく広重の暗示を受けたとしているが、ストレンジは広重の影響を否定している(本間 1934c: 121-122)。
- 41) (本間 1934c: 130)
- 42) (本間 1934c: 139)
- 43) (本間 1934c: 134-145)
- 44) (本間 1934c: 145)

- 45) (本間 1934c: 148)
- 46) (本間 1934c: 150)
- 47) (本間 1934c: 154-155)
- 48) (本間 1934c: 165)
- 49) (本間 1934c: 169-224)
- 50) ワイルドに対するラスキンの影響については、研究者の間で一致を見ず、クック (E.T.Cook) はその著 *Studies in Ruskin* のなかでラスキンの影響を重視しているが、『ワイルド傳』の著者ロバート・シェラードは、ワイルドに対するラスキンの影響はさほど強調すべきでないと考えている。本間自身はラスキンの影響はかなり大きなものがあったに違いないと考えている(本間 1934c: 172).
- 51) 本間は、特にマックス・ノルダウ (Max Nordau) の『墮落時代』(*Degeneration*) の「デカダン主義の誇大妄想狂、技巧的なもの、愛好、自然に對する嫌惡、活動や運動のあらゆる形式に對する憎惡、人間に對する自我狂的侮蔑、藝術の重大性の誇張——英國における「唯美派」のかう云ふ主張の代表はオスカア・ワイルドである」という説を紹介している (本間 1934c: 193).
- 52) (本間 1934c: 200)
- 53) この理由についてラ・ブーシェールによる雑誌『真理』(*Truth*) の記事からいくつかの説を本間は紹介している。ワイルドは詩集を出すためには有名にならなければならない、そのために目立たなければならない、と考えたからだということである (本間 1934c: 191-193).
- 54) (本間 1934c: 196-197) (Sherard 1928: 167 & 172)
- 55) (本間 1934c: 226-227)
- 56) (本間 1934c: 229)
- 57) (本間 1934c: 229-230)
- 58) (本間 1934c: 232)
- 59) (本間 1934c: 236)
- 60) (本間 1934c: 237)
- 61) (本間 1934c: 242-248)
- 62) (本間 1934c: 250)
- 63) (本間 1934c: 250-251)
- 64) (本間 1934c: 254-255)
- 65) (本間 1934c: 257)
- 66) (本間 1934c: 268)
- 67) (本間 1934c: 271-272)
- 68) (本間 1934c: 286-287)
- 69) (本間 1934c: 291)
- 70) (本間 1934c: 294)
- 71) (本間 1934c: 297)
- 72) (本間 1934c: 300)
- 73) 最初のものは1882年のアメリカ講演の草稿である『英國文藝復興』である。彼は西洋のジョルジオーネやティティアンの作品と対比するものとして、東洋のそれ、日本のそれをあげている。ワイルドは日本の藝術の価値を認め、これに照らして西洋の藝術を批判している。第2の文献もアメリカ旅行中のもので、『藝術及び手工藝家』で、アメリカの工芸家に対して手工芸の意義と価値を説いているが、そのなかで、世界中のもっとも良い裝飾美術の見本として日本のそれをあげている。第3の文献は1888年、彼の主宰した『婦人世界』に載せた「魅惑的な書物」で扱った書評である。ルフェビュール著の『刺繍およびレース』の書評で日本を含む東洋の西洋の刺繍におよぼした影響について述べている。第4の文献は、1888年「ベル・メル・ガゼット」所載、ウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) の講演『藝術及び手芸協会』主催の講演会での講演を批評したものである。ワイルドは、クレインが日本の藝術を低く評価していることを批判している。第5の文献は、翌1889年『婦人世界』所載のさまざまな新刊書について書いた批評のなかでも日本の藝術を礼讃している箇所がある (本間 1934c: 304-312).
- 74) (本間 1934c: 323)
- 75) (本間 1934c: 331-332)
- 76) (本間 1929: 110-114)
- 77) (本間 1934c: 376)
- 78) (本間 1934c: 408)
- 79) (本間 1934c: 413)
- 80) (本間 1934c: 416-417)
- 81) (本間 1934c: 5-11, 417-421)
- 82) (本間 1934c: 422)
- 83) (本間 1934c: 443)
- 84) 『東京堂月報』1934年11月15日号広告、『東京日日新聞』1934年6月23日より転載。
- 85) (平田 1934)
- 86) (西脇 1934)
- 87) (本間 1973: 182-183)
- 88) 1932年(昭和7年)後半、本間はすでにラジオ放送で「家庭大學講座『明治文學』」を担当している。1934年(昭和9年)『英國近世唯美主義の研究』、そしてそれと前後して『イギリス文學史(十九世紀 上)』、『イギリス文學史(十九世紀 下)』が刊行されているが、その2ヶ月後『明治文學史

上』が刊行されている。

参考文献

- Hirata, Yoko (2009a). Oscar Wilde and Honma Hisao, The First Translator of *De Profundis* into Japanese *Japan Review*. 21: 241-266.
- Sherard, Robert Herborough (1928). *The Life of Oscar Wilde*, New York, Dodd, Mead & Company.
- 井村君江 (1969) 「日本におけるオスカー・ワイルド—移入期 (第1部) 『鶴見女子大学紀要』 7: 39-60.
- 佐々木隆 (1999) 「明治時代のワイルド受容」『武蔵野短期大学研究紀要』 13: 133-141.
- 佐々木隆 (2001) 「大正時代のワイルド受容」『武蔵野短期大学研究紀要』 15: 87-96.
- 佐々木隆 「書誌から見た日本ワイルド受容研究 (明治篇)」 <http://www.ne.jp/asahi/econ/wild/page161.html>, 閲覧日2009/09/20.
- 佐々木隆 「書誌から見た日本ワイルド受容研究 (大正篇)」 <http://www.ne.jp/asahi/econ/wild/page161.html#taisyo>, 閲覧日2009/09/20.
- 島村抱月 「英國の尚美主義」 (1907) 『明星 未歳第9号』: 1-7.
- 島村瀧太郎 (抱月) (1909) 『近代文藝之研究』 早稲田大学出版部.
- 島村抱月 (1919) 『抱月全集 第三卷』 天佑社.
- 西脇順三郎 (1934) 「スクラップ・ブック: 英國近世唯美主義の研究」『東京堂月報』 21/10: 56-57. 『東京朝日新聞』より転載.
- 野中涼 (1984) 「日本の英米文学者—学風と方法: 本間久雄」『別冊 英語青年』 6月号: 10-11.
- 平井博 (1980) 『オスカー・ワイルド考』 東京, 松柏社.
- 平田禿木 (1934) 「ブック・レビュー 『英國近世唯美主義の研究』」 本間久雄氏著 『東京日日新聞』 1934年6月29日.
- 平田耀子 (2008a) 「本間久雄: 『滯歐印象記』, 『英國近世唯美主義の研究』そしてそれ以後 (一)」『英語英米文学』 49: 23-40.
- 平田耀子編著 (2008b) 『本間久雄書誌』 雄松堂.
- 平田耀子 (2009b) 「ウィリアム・モリスと本間久雄」『人文研紀要』 66: 115-146.
- 平田耀子 (2009c) 「島村抱月と本間久雄」『人文研紀要』 (近刊).
- 本間久雄 (1918a) 「民衆藝術の問題」『早稲田文學』 151: 21-23.
- 本間久雄 (1918b) 「労働の快樂化・藝術化」『新小説』 第23年第8巻: 7-14.
- 本間久雄 (1919) 「藝術と労働生活」『文章世界』 第14巻第10号: 271-276.
- 本間久雄 (1924) 「美感の頹廢」『早稲田文學』 226: 2-18.
- 本間久雄 (1925a) 「近世英文學上の二つの快樂主義」『早稲田文學』 227: 20-25.
- 本間久雄 (1925b) 「近世英文學上の頹廢派の運動」『早稲田文學』 228: 2-15.
- 本間久雄 (1925c) 『近代藝術論序説』 文省社.
- 本間久雄 (1929) 『滯歐印象記』 東京堂.
- 本間久雄 (1930a) 「オスカア・ワイルド下獄記」『改造』 12(1): 87-104.
- 本間久雄 (1930b) 「オスカア・ワイルド」『世界文學講座第3巻 英吉利篇 上巻』 新潮社: 471-480.
- 本間久雄 (1930c) 「ワイルドと日本」(1)~(3)『朝日新聞』 3月14, 15, 17日.
- 本間久雄 (1930d) 「英國近代藝術に及ぼせる日本の影響」『文學思想研究』 12: 3-26.
- 本間久雄 (1931a) 「讀書餘録 ワイルドの手紙」『國民新聞』 昭和6年2月4日.
- 本間久雄 (1931b) 『文学論攷』 東京堂.
- 本間久雄 (1931c) 「唯美主義とオスカア・ワイルド」『総合世界文學研究』: 201-230.
- 本間久雄 (1934a) 「オスカア・ワイルドと日本」『文学』 2(1): 107-111.
- 本間久雄 (1934b) 「オスカア・ワイルド傳—大學生活についての斷片」『文學思想研究 1934年版』: 275-289.
- 本間久雄 (1934c) 『英國近世唯美主義の研究』 東京堂.
- 本間久雄 (1934d) 『東京堂月報』 1934年11月15日号.
- 本間久雄 (1957) 『自然主義及び其以後』 東京堂.
- 本間久雄 (1964) 『續明治文學史 下巻』 東京堂.
- 本間久雄 (1965) 『明治文學 考證・隨想』 新樹社.
- 本間久雄 (1973) 「私の卒業論文」(『国文学 解釈と鑑賞』 1973年4月, 182-183.

[付記] 本稿は平成20-21年度科学研究費補助金, 基盤研究(C)による研究成果の一部である。